

# 本を片手に文学散歩 尾崎一雄 朗読会

令和3年4月18日(日) 10:00~11:30

ミナカ小田原 東口図書館

## プログラム

挨拶 NPO 法人小田原ガイド協会会長 堀池衡太郎  
司会 UMECO 椎野典子

### 第一部

第1章 『単線の駅』より「雀百まで」  
朗読 ラパンの会 太田雅江

第2章 『あの日この日』より「五十九」(抄)  
朗読 しろの会 本多 博

第3章 『あの日この日』より「二十三」(抄)  
朗読 しろの会 塚本容子

— 休憩 —

### 第二部

第4章 「虫のいろいろ」(抄)  
朗読 太田雅江

第5章 「夕顔」(抄)  
朗読 本多 博

第6章 「美しい墓地からの眺め」(抄)  
朗読 塚本容子

### 尾崎一雄

明治32年(1899)三重県生まれ。早大国文科卒。志賀直哉に傾倒し、生活苦の中で執筆活動をする。「暢気眼鏡」他で昭和12年第5回芥川賞受賞。生活体験から庶民生活の哀歓をユーモラスな筆致で描いた私小説作家の代表。「虫のいろいろ」「美しい墓地からの眺め」の他、回想記「あの日この日」など私小説・心境小説に独自の境地を開く。下曾我の宗我神社に文学碑がある。

#### 「雀百まで」

なぜ自分に木登りの癖がついたか、蜜柑や梅などの果樹や、神社の松や杉などに登った思い出とともに語る。

#### 「五十九」

片道8キロの長距離通学路を星霜踏んで通い、時には遅刻魔の河野一郎と競争しながら今の小田校へ駆け込んだ日々を描く。

#### 「二十三」

関東大震災、その被害状況(大正十二年)  
隣家の昼時に大震災に襲われた時の大変な様子、宗我神社の近の大鳥居が崩壊し、山々は山崩れ、富士山だけは悠然と立っていた。

#### 「虫のいろいろ」

病床にやってくる虫たちの生態を観察する中で、自身の生死について見つめる。文学碑の碑文となった一節と冒頭の蜘蛛について、朗読。

#### 「夕顔」

夕顔の箱植を育て三年も続けて届けてくれたご近所柴山家とのしめやかな交流。夕に花を開いて朝にしぼむ夕顔を眺めながら、療養生活を送るひっそりとしたたずまいの笹子の身を案じる。

#### 「美しい墓地からの眺め」

美しい眺めの墓地の下へ入った時の空想の面白さと現実を生きる者の「生」への気概を表明した第5章の朗読。